

皮膚がんについて

III 播磨病院 皮膚科 森田秀樹
(平成29年度相生市健康大学講座講演要旨)

1) 皮膚がんを疑う所見は？

大きさ：良性の場合は急に大きくなりません。急に大きくなる場合はがんの可能性がります。

色調：均一でなく濃淡を生じます。出血を伴う場合も要注意です。

形態：いびつで染み出しを伴います。

2) がんができやすい部位は？

紫外線が原因となることが多い有棘細胞癌は顔面に好発します。

ホクロのがんと言われるメラノーマは足底や爪に好発します。

外陰部にできやすいパジェット病は受診が遅れがちです。

3) 治療は？

早期に発見し、腫瘍を切除することが治療の基本です。最近では、免疫学の進歩により、がんをとりまく免疫環境についての研究が進んでいます。免疫チェックポイント阻害剤は従来の抗がん剤では薬剤自体が、がん細胞に直接的に作用して殺傷するものがほとんどのであったのに対し、体内の T 細胞を利用してがん細胞を制御するものであり、従来の薬物療法とは全く異なる作用機序を有しています。進行がんでは、制御性 T 細胞が増加し、エフェクター T 細胞が、がん細胞を攻撃することを抑制しています。免疫チェックポイント阻害剤は制御性 T 細胞の抑制作用があると考えられています。分子標的薬は、がん細胞のみ攻撃する目的で開発され副作用は軽減しましたが、皮膚細胞は攻撃され、手足症候群などの副作用対策を行いながら治療します。

4) 皮膚がんにならないためには？

紫外線に対する対策が必要です。実際、紫外線の多い地域では少ない地域より皮膚がんの発症頻度が高いことが報告されています。

(文責： 森田秀樹)